彼の色恋沙汰、彼女の色恋沙汰

（全）

十佐間つくお

第一話　だらしないおじさんと完哉の初恋　１８枚

第二話　ホレやすい沙悠里の花火観覧　１３枚

第三話　ホラーな恋、自主映画制作の現場で　１７枚

第四話　サードギターの男　７枚

第五話　中華料理屋でさようなら　１０枚

第六話　女友達には内緒にしたい大学の先輩のこと　１７枚

第七話　うまくいきそうで、うまくいかない　３２枚

第一話
「だらしないおじさんと完哉の初恋」　1992年夏 小田完哉 10歳

　夏休みというといつもぼんやりしていた。
　暑かったからだし、することが何もないからだった。あんまりぼんやりしていたので、自分がつまらないと感じているのだということさえ考えつかなかった。
　そんなぼくを見かねたのか、ある夏、しょうちゃんが遊びに連れ出してくれた。しょうちゃんは母の年の離れた弟で、ぼくの叔父さんに当たる人だ。昌太郎だから身内からはしょうちゃんと呼ばれていた。
　しょうちゃんは、お盆やお正月なんかに親族が集まるとき、知らぬ間にひょっこり現われては、いつの間にかいなくなっているような、そんな人だった。浮世離れしているところがあって変わり者扱いされていたけど、ぼくは好きだった。
　年に一度か二度、ぼくの家に連絡もなしにぶらりとやって来ることもあった。
　そういうとき、いつも欠かさずお土産を持ってきてくれた。騎馬民族の馬具の一部だとか、呪術に使ったという亀の甲羅。それに吸血鬼よけの十字架。どこかうさん臭くて変なものばかりだったけど、ぼくはいつも楽しみにしていた。
　中でもインディアンの矢尻は宝物だった。インディアンの戦士になって侵略者と戦うというのが当時のぼくのお気に入りの空想で、勉強机の引き出しにしまってあるのを取り出しては飽きもせず眺めたものだ。
　その矢尻も今ではどこかにいってしまった。
　しょうちゃんが何の仕事をしていたのか、よく知らなかった。タクシーの運転手だとか、肉を卸しているだとか、救急隊員だとか、輸入業だとか、本人の口からあれこれ聞いた覚えがあるけど、どれも本当かどうか怪しかった。
　あとになって母に聞いたところでは、しょうちゃんはどんな仕事も長続きしなくて、お金に困るたびにうちに借りに来ていたらしい。そうやってうちが援助することもあれば、どこかの女の人に借りることもあったようだ。
　いつか、しょうちゃんに借金を踏み倒されたという女の人がぼくの家に乗り込んできて、一悶着あったこともある。ぼくが詳しい事情を知ったのはずっとあとのことだっ

たけど。
　小さい頃は、しょうちゃんによく一緒に遊んでもらったものだった。川で魚取りをしたり、映画に連れて行ってもらったりした。ぼくが高校生のときにコンビニになってしまった近所の駄菓子屋で、よくお菓子を買ってもらったのを覚えている。
　そうしたお金もうちから出たものだったことになるわけだけど、そんなこととは関係なくぼくは喜んだ。
　考えてみると、ぼくが小学生当時、しょうちゃんはまだ三十歳にもなっていなかったことになる。もっとずっと年上なのかと思っていたけど、そんなことはなかったのだ。

　その夏、しょうちゃんに連れ出してもらったぼくは、何をしたいというのもなかったし、どこへ行きたいというのもなかった。それでどんな希望を言ったわけでもないうちに、熱海に連れて来られていた。
　その町で、取り立てて何を見たというのでもなかった気がする。二人で辺りをほっつき歩いたあと、しょうちゃんは「こんなもんか」と言った。面白くはないけど、別につまらなくもないという感じだった。
　ぼくの感想もだいたいそんなところだったから、真似をして「こんなもんか」と思った。坂が多く、一つの坂が別の坂とつながったりして、ごちゃごちゃと入り組んだ高低差のある町並みが印象的だった。
　ぼくたちは、緩やかな下り坂の途中で脇にひょっこり階段が現れたのを見つけて立ち止まった。海への近道らしい、狭くて急な石造りの下り階段だった。手すりすらついてなかった。下の家々の向こうに海が広がっているのが見えた。快晴で、海面がきらきらと光ってまぶしかった。
「海行くか」しょうちゃんが言った。
「ここから見えるよ」ぼくは答えた。
「まぁ近くまでさ」
　海に出て何をするわけでもなく、ぼくたちは浜辺を適当にぶらぶらした。
　波打ち際で遊んでいてふと気がつくと、しょうちゃんが誰か知らない女の人と話していた。冗談でも言ったらしく、女の人が愉快そうに笑った。別に美人ってわけじゃなかった。
　しょうちゃんは、やがて手を振って女の人を見送ると、ぼくのところに来て言った。
「昨日花火があったんだって。熱海、いいとこだな。一泊するか」
「え」
「姉貴にはオレが言っとくから」
　しょうちゃんは一人で決めてしまった。自分からは一言も触れなかったが、子供心にも今の女の人が何か関係しているらしいと分かった。いつの間にか、熱海もいいところということになっていた。
「カン介も夏休みの思い出がいるだろ？」
　しょうちゃんはときどきぼくを「カン介」と呼んだ。相手を気安く呼ぼうとすると、何でも介をつけて言うのだった。
　旅館で部屋に通されるなり、しょうちゃんは「自分のことは自分でできるよな」と言

った。
「うん」ぼくはあやふやに答えた。
「テレビもあるし、温泉もいつでも入れるし、ゲームも卓球もできるし」
　ぼくは、どうなるんだろうと不安に思ってしょうちゃんを見た。しょうちゃんは、鏡台の引き出しを開けてみたり、洗面所の水の出をチェックしたり、窓からの景色を見たりして、ぼくの方はろくに見なかった。
「夕飯は六時半だっていうから、そのときには部屋に戻ってろよ」
「しょうちゃんは？」
「オレのことは心配しなくていい」
　ぼくはしょうちゃんのことは心配していなかった。一人にされる自分のことが心配だったのだ。でも、しょうちゃんには通じないらしかった。
「お金ない」ぼくは言った。
「お、そうか」
　しょうちゃんは財布から千円札を一枚取り出した。ちょっと考えてそれを再び札入れに戻すと、今度は小銭入れから五百円玉を一つ取り出した。
　しょうちゃんはそれをくれながら、「よし」と自分でうなずいた。
「大丈夫だよな、もう六年生なんだから」
「五年」
「お前、五年生か」
「うん」
「そうか。もしあれだったら、先に寝てていいからな」
　しょうちゃんはそう言い残して行ってしまった。

　ぼくは一人で旅館をぶらついた。
　中庭に出てみると、わりと大きなひょうたん池があった。真ん中のすぼまったところに太鼓橋が渡してあって、その上から鯉が泳ぐのがよく見えた。手を叩くと、餌がもらえると思った何匹かの鯉が水面に顔を出し、口をぱくぱくさせた。
　離れの大浴場に向かう通路の脇には娯楽室があった。アーケードゲーム数台と卓球台が置いてあったが、ゲームはどれもやり方が分からなかったし、ワンプレイ二百円もした。すぐ終わってしまうと思ってやらなかった。
　隅に本棚があり漫画雑誌が並んでいた。ぼくは適当に一冊引き抜いて、奥に二台並んで置かれていたコイン式のマッサージチェアに座って読んだ。特にファンではない週刊漫画雑誌だったけど、他にたいしてすることもなかった。
　しばらく読んでいると、突然声をかけられた。
「お金入れなきゃ動かないよ」
　見ると、よく日焼けした背の高い女の子が立っていた。温泉から出たところらしく、長い髪の毛が濡れて光っていた。とても整った顔立ちだった。
「知ってる」
　ぼくは答えた。座り心地がよさそうだから座っていただけだった。
　女の子が近寄ってきて、ぼくは何となく身構えた。
「お金ないの？」
「あるよ」
「何してるの」
「漫画」
　ぼくは何となく気恥ずかしくて、見れば分かるだろという風にうっとうしそうに答えた。
　女の子はじっとこちらを見ていた。ぼくは身をよじって背を向けるようにした。
「キミ、何年生？」
「五年」
「私は中一」
　かなり年上だった。どう口をきいたらいいか分からなくて、ぼくは黙り込んだ。
　女の子は誰にともなく「ふーん」と言った。どうするかと思っていると、彼女はそのうちに行ってしまった。少しがっかりしたけど、それ以上にほっとした。
　また一人になると、ぼくは漫画を閉じた。入り口脇の道具入れからぼろぼろになった

卓球のラケットを取り出し、ピンポン球を床に落とさないようバウンドさせて遊んだ。

　しばらくすると、さっきの女の子がまた姿を見せた。髪の毛はすっかり乾いて、薄レモン色のシャツとショートパンツに着替えていた。小麦色の肌をした手足がすらりと伸びて、健康的な感じがした。
　ぼくはなんだかどきどきして彼女から目を逸らした。声をかけてもらっては困るとでもいうようにピンポン玉に集中した。
　女の子はちょっとの間ぼくが遊んでいるのを黙って見ていた。それから「これ読んでいい？」と、ぼくがさっきまで読んでいた漫画雑誌を指した。ぼくは黙ってうなずいた。
　女の子はぼくがそうしていたように、マッサージチェアに座って漫画を読みはじめた。ぼくは続けてピンポン球に取り組んだ。今度は一回バウンドさせるたびにラケットを表にしたり裏にしたりした。
　それぞれ別のことをして何の交流もなかったけど、お互いを意識しているのが分かった。少なくとも、ぼくの方ではそんな気がした。
　失敗してピンポン球が廊下に転がっていった。取りに行こうとすると、いつの間にか入り口のところにしょうちゃんが立っていた。
「よお」
　しょうちゃんはぼくと女の子を代わるがわる見た。
「一緒に遊んでたのか？」
「別に」
　ぼくは答えた。女の子は漫画から目を上げて、ぼくたちの様子を伺った。
「カン介」
　しょうちゃんはぼくを手招いた。
「何？」
　ぼくは、彼女の視線を気にしながらしょうちゃんのもとに行った。
「ちょっと庭でも散歩して来いよ、あの子と二人で」
　しょうちゃんはぼくに囁いた。それでも女の子にも筒抜けなのは間違いなかった。
「なんで？」
　恥ずかしいのとわけが分からないのとで、ぼくは言った。
「別にいいじゃんか。なぁ？」
　しょうちゃんは女の子に声をかけた。

「私は別にいいけど」
　女の子はまんざらでもなさそうに言った。
「行ってこいよ。池に鯉がいるぞ」
　しょうちゃんが再びぼくに言った。
「さっき見た」
「もう一回見ろよ」
「なんで？」
「なんでってことないだろ？」
　しょうちゃんは女の子に「名前は？」と訊いた。
「アヤ」
　アヤという名の女の子は、マッサージチェアから立ち上がって漫画を本棚に戻した。
「アヤちゃんか。こいつはカン介ね」しょうちゃんがぼくを紹介して言った。
「カンサイ」ぼくが正しい名前を教えた。
「カンサイ？」アヤが言った。
「そうそう、カンサイ」しょうちゃんが訂正した。
「変なの」アヤが言った。
「変じゃない」ぼくはむっとして言った。
　ぼくの名前は、完哉と書いてカンサイと読むのだった。関西とひっかけてからかわれることが多くて、自分でも好きな名前ではなかった。でも、カン介が本当の名前だと思ってもらっても困るのだ。
「いいから行ってこいって」
　しょうちゃんは、半ば強引にぼくたちを送り出した。

　ぼくとアヤは一緒に中庭を歩いた。ひょうたん池を半周回って橋を渡り、途中で上から鯉が泳いでいる様子を覗き込んだ。それから橋を渡りきると、残りの半周を逆周りに歩いて、もう一度橋を渡った。
　その間、ぼくたちは互いに二歩くらい離れたまま、ずっとだんまりだった。
「それで？」アヤがぼくを見て言った。
「分かんない」ぼくは言った。
　ぼくたちはまた娯楽室に戻った。しょうちゃんはマッサージチェアに座って漫画を読んでいた。マッサージチェアはやはり動いていなかった。
「早いな」
　しょうちゃんは驚いたように言って立ち上がった。
「それで？」今度はしょうちゃんが言った。
「うん」ぼくは言った。それでと言われても、その先は分からなかった。
「なんだよ。そしたら卓球でもするか？」
「私、そろそろ行かないと」アヤが言った。
「そうなの？」しょうちゃんが言った。
「もう帰る時間だから」
「そうか」しょうちゃんが残念そうに言った。そして「どこから来たの？」と改めて訊ねた。
「練馬」アヤが答えた。
「東京っ子だぞ、カン介」しょうちゃんが喜べとでもいうように言った。
「うん」
　そうは言ったものの、ぼくにはそれがどこなのか分からなかった。
「あのさ」しょうちゃんがアヤに言った。「こいつが住所教えてほしいって思ってるみたいなんだけど」
「思ってないよ」ぼくは訂正した。
「思ってるんだよ」しょうちゃんはぼくに向き直って言った。「思うべきだ、お前は。こんな美人を前にして」
　しょうちゃんがそう言ったので、ぼくはアヤが美人なのだとはっきり知った。もう一度彼女の顔を見ようとすると、アヤはアヤで反応をうかがうようにぼくを見ていた。困って目を逸らしたけど、ちらっと見ただけでも彼女がやはりきれいな顔立ちをしていることが分かった。もっとよく確かめたいと思った。

「いいかな？」しょうちゃんが再びアヤに確認した。
「いいけど」アヤは言った。
　気がつくと、ぼくの手には彼女の住所が書かれた紙切れが握らされていた。
「夏休みのうちに手紙書くから」
　しょうちゃんが勝手に約束した。帰ってしまうのかと思うとぼくも少し淋しかった。
　最後に、ぼくは「バイバイ」と言って手を振った。
　アヤも「バイバイ」と言って手を振って返した。そのとき、彼女がはじめてにこっと笑った。ぼくは一瞬息が止まるような、胸がつまるような、変な感じがした。
　アヤが行ってしまうと、横にいたしょうちゃんが何か言いたげな顔でぼくを見下ろしていた。
「何？」
「お前、ほんとにぼんやりしててダメだな」
　しょうちゃんはしみじみと言った。
　ぼくは何のことかいまいち分からないながらも、そうなのかなとぼんやり思った。
「ま、今日のところはお互い様か」しょうちゃんが言った。
　それもまた何のことか分からず、ぼくはしょうちゃんを見た。
「焦りすぎてもダメなんだぞ」
　何となく、海で話していた女の人のことを言っているのだと分かった。
「メシ、今からオレの分も頼めるかな」
　しょうちゃんが誰に訊くでもなく言った。
「知らない」
　ぼくは知らなかったのでそう答えた。
　結局、アヤに手紙を書くことはなかった。その夏のうちにも、夏が終わったあとにもだ。熱海から帰ってすぐに忘れてしまったんだと思う。住所を書いた紙切れをどうしたのかも、もう思い出せない。
　しょうちゃんは、いつの頃からか親戚の集まりに顔を見せなくなっていた。そうすると、ぼくの家にお金の無心に来ることもなくなった。母も行方を知らないという。
　しょうちゃんとはもう二十年近く会っていない。

二話につづく

第二話
「ホレやすい沙悠里の花火観覧」　1998年夏 宮地沙悠里 15歳

　高校一年の夏、クラスの友だち六人で熱海へ花火を見に行った。
　学校のあるＪＲ平塚駅で待ち合わせて電車で向かったのだけど、降りた駅は熱海ではなかった。一つ手前の湯河原だった。
　その町に住み、平塚まで越境通学している青木くんが、花火見物にうってつけの穴場を教えてくれることになっていた。
　湯河原駅の改札を抜けると、青木くんが周辺地図の看板の前で両手を腰に当てて立って待っていた。無地の藍色のＴシャツにチェックのハーフパンツという恰好が、夏っぽくて似合っていた。
「うし」青木くんは、みんなを見ると気合を入れたように言って、「ちょっと歩くから」といきなり歩きはじめた。
　私たちは「いきなりかよ」と笑いながら、ぞろぞろついていった。男が青木くん、武居くん、蓮田くんの三人。女が宝生彩花、澤田あおい、私の三人だった。

　青木くんは背が高く、どこか知的な顔立ちで、クラスで一番数学ができた。クールだけど無口すぎることはなく、ときどき何か企んでいるような悪そうな目つきになるのが私はけっこう気に入っていた。部活は陸上部だった。種目はハードルだ。
　女子の間では話の面白い男子が人気があったが、青木くんのようなタイプにも確実にファンがいた。
　宝生彩花もその一人だった。
「青木くんに私服が新鮮って言われた」
　彩花が私のところに来て嬉しそうに言った。彩花と私は中学からの友だちだった。
「よかったね」
　私は友人としてそつなく答えた。だけど、彩花が、私もまた青木くんのことがちょっと気になっているのを抜け目なく感じ取っていて、けん制のためにわざわざ言ってきたのだということは分かっていた。
　私は青木くんに気があることを表明できないでいた。
　というのも、七夕の頃までは木場くんがいいと言っていたからだ。惚れっぽい私だ。
　木場くんは学年でもダントツ人気のサッカー部の男子だった。周りの子が木場くん木場くんとはしゃいでいるのに乗せられて私も浮かれてみたけど、実のところ話したことさえなかった。「おはよう」とか「おつかれ」とか挨拶することを目標にしていたけど、それも達成できないうちに、木場くんは一緒に七夕に行ったという別のクラスの子と付き合いはじめたのだった。
　そうしたら、急に彼のことなんてどうでもよくなってしまった。多分、最初からそこまで好きじゃなかったんだと思う。
　それですぐに青木くんに乗り換えたのかというと、ちょっと違う。青木くんのことはクラスで一緒になった最初から、ちょっといいなと思っていたのだ。それに、彼の方でも私のことをちょっとはよく思ってくれている気がしていた。
　ちょっと待って、証拠もあるから。
　例えば、青木くんは彩花のことは「宝生さん」と呼ぶし、他の女の子のことも苗字にさん付けで呼ぶけど、私のことは「さゆりん」と呼ぶのだ。ときどきだけど。でも、他の人が聞いてないときに。普段あまり見せない、甘えたような、ふざけたような感じで。
　どうですかね、これ。ちょっと気になるでしょ。
　それとも、青木くんは誰も聞いてないときに彩花のことを「あやや」とでも呼ぶこと

があるんだろうか。いや、そしたら彩花が言いふらしているだろう。
　私のことだけそんな風に呼んでいるのだ。それ以上の何かがあるかと言ったら、何もないのだけど。

　穴場までの道のりは、長く険しかった。
　炎天下の中、私たちはろくに整備もされていない土の坂道や階段、みかん畑を抜ける農道を汗だくになりながら歩いた。飲み物を買ってくるべきだった。
「青木、あとどんくらい？」三十分も歩いた頃、蓮田くんが大声で訊いた。
「一時間はかからないと思う」先頭を歩く青木くんが、やはり大声で答えた。
「えーっ！」私たちは悲鳴にも似た声を上げた。
　思わず叫びたくもなったけど、いかにも夏休みのイベントっぽい冒険めいたところがなくもなかったから、みんなの声にはどこか面白がってる響きもあった。
　私はいつの間にか一人でしんがりを務めていた。
　彩花はさっきから青木くんにへばりついて離れず、私の前は蓮田くんと澤田の二人が道をふさいでいた。この二人はいつ付き合いはじめてもおかしくない雰囲気なのだけど、なかなか付き合わないで周囲をやきもきさせていた。
　青木くんと彩花、蓮田くんと澤田の二組に挟まれた武居くんは、わざわざ私のところへ来ようとはしなかった。
　一人取り残された私は、次第にやさぐれた気分になっていった。
　彩花はひらひらしたスカートを履いて、いかにも女の子っぽい格好をしていた。青木くんが彩花に言ったという言葉を思って、私の胸はちくりとした。青木くんはああいうのが好きなんだろうか。服装に無頓着な私は、自分のイモさ加減がいやになった。やっぱり、洋服くらい自分で買えるようにならなきゃダメだ。
「ね、協力してよね」さっき彩花はそうも言ったのだった。
　こういうとき、彼女がどこまでも図々しくなれることは分かっていた。こちらとしては「うん」と言わざるを得なかったけど、そう言ってしまった以上、もし私が先に青木くんに手を出したら裏切り者ということになってしまう。
　下手をすると、女子の間でかなりまずい立場に追い込まれてしまうだろう。クラスのというだけでなく、学年全体の女子の間で。もしかしたら学校全体かもしれない。面倒くさいけど、それが女子高生の世界なのだった。
　とにかく、彩花のけん制にはちょっとした気後れを感じさせるだけの効果はあった。そして、男女関係にあっては、そのちょっとの気後れが命取りになるのだ。その日、私は青木くんとまだ一言も喋っていなかった。

　やがて、海沿いを走る道路に出た。
　すぐ向こうが崖になっていて、その下に海があった。目的地は道沿いにもうしばらく行ったところらしいが、歩道がないのであとは崖っぷちのガードレール沿いに歩くというのだ。
　青木くんが、車が来てないことを確かめながら、一人ずつ道路の反対側へと送り出した。
　彩花が渡り、武居くんが渡り、蓮田くんと澤田が一緒に渡った。
　最後が私だった。青木くんは待てと手で制しながら左右を見て、何台か車をやり過ごした。話しかけるチャンスだったけど、しんがり気分が振り払えず、彩花のけん制も効いてしまっていた私は、ただバカみたいに突っ立って何もできなかった。
「おっけ。行くよ」
　青木くんが言って、道路を渡りかけた。あとは私と青木くんだけだから、一緒に渡ろうというのだ。私はまごついて、うまく足を踏み出せなかった。
「ほら、さゆりん」青木くんが手招いた。
　そう呼ばれてはっとなり、私は慌ててあとをついていった。

　すぐ横を車が走り抜けていくのを、ガードレールにぴたりとくっつくようにして歩いた。
　何台か車が過ぎるのを待ったせいでみんなとの間に距離ができていたけど、青木くんはわざわざ詰めようとはしなかった。私は、すぐ前にある彼の背中を見ながら歩いた。
「いつも行き帰りって何してるの？」
　ようやく私の口から出たのは、そんな面白味もない言葉だった。
「え？」青木くんが首をひねるようにして訊き返した。
「学校の。電車の中とか」
　学校から青木くんが住む湯河原までは、電車とバスを乗りついでゆうに一時間はかかりそうだった。私はといえば、学校から徒歩で十分もかからないところに家があった。
　青木くんは、「えー」と言いながら前に向き直って考えた。
「考えごとかな」
「何それ。例えば？」
　青木くんが例の何か企んでいるような悪そうな目つきになってこちらを振り返ったので、私はちょっと身構えた。彼は身体ごと私の方を向いて、後ろ歩きになりながら真顔で言った。
「さゆりんのこと」
　そして、私の反応を見もしないで、またくるっと前を向いてしまった。
　見られなくてよかった。かあっと熱くなった私は、きっと顔が真っ赤になっていたに違いないからだ。
「ウソだぁ」
　私は冗談にしようとして、やや上ずった声で彼の背中に言った。こちらを向かれたままだったら、何も言えなかったかもしれなかった。
　何も反応が返ってこないので、ちょっと焦った。そしたら、青木くんは少しだけ首をひねってこちらに横顔を見せた。そして、「まぁウソだけど」とクールに言うのだった。
　自分自身とこの状況が一気にものすごく恥ずかしくなった。からかわれただけなのか、一瞬でも真に受けた私がバカなのか。心臓がばくばくと跳ね回った。
「真面目な顔してウソ言うの、やめてよね」
　私は鼻息荒く言った。抗議をするためか、恥ずかしさを押し隠すためか、自分でも分からなかった。

前を向いて歩く青木くんは笑ったようだった。それからまた横顔を見せて、「じゃあ、まったくのウソじゃないってことにしとこうかな」と言った。

ほらまた。この人は、こうやってじわじわ私の心に入り込んでくるのだ。そして、面白半分に弄ばれているだけかもしれないのに、頭ではそう分かっているのに、私はそれを許してしまう。

そのとき、一番前を歩いていた彩花が「青木くん！」と大声で呼びかけてきた。彩花はぴょんぴょん跳ねながら前方を指さして、「あれー？」と言った。

彩花がカーブにさしかかったところにいたので、私と青木くんには彼女の指すものが見えなかった。青木くんは小走りに列を追い抜いて前に行ってしまった。いつの間にか日は暮れ、道路は熱海方面に向かう車で混み合いはじめていた。

　その店じまいして久しい様子の小さなレストランは、次のカーブの膨らみの外側に海に突き出すようにしてあった。駐車場には車が三台停められるスペースがあったが、入り口にはロープが何重にも張られ立入禁止になっていた。

　とはいえ、人がちょっと入るくらいは問題なさそうだったし、それにはロープをくぐり抜けるだけでよかった。私たちはためらいなく敷地に入り込むと、海側の壁に駆け寄った。かなり厚みのある、胸の高さほどのそのコンクリの壁に、みんな身を乗り出すようにして横並びになった。

　そこからは熱海の海と町並みが一望できた。私たちの他には誰もおらず、まさに穴場だった。下を覗きこむと、夜の暗い海だった。波が岸壁に打ちつける音が離れて聞こえ、レストランがかなりの高さにあることが分かった。

　そのとき、最初の花火が打ち上げられた。

　夜空にきれいな光の輪が広がって、すぐあとに空を叩きつけたような音がドンと響いてきた。みんながわあっと歓声を上げた。

　私は、隣にいた武居くん越しに青木くんをちらりと見た。青木くんも同時に私を見て、ほんのちょっとの間、私たちは目を合わせた。

　次の花火が上がって、青木くんの横顔が反射でかすかに赤らんで見えた。

三話につづく

第三話
「ホラーな恋、自主映画製作の現場で」　2000年夏 小田完哉 19歳

　大学でぼくは映画研究会に入った。
　サークルでは、夏休みの合宿で短編を一本撮ることが慣わしになっていた。そこで撮影したものを編集し、秋の学園祭で上映するのだ。短編作りの中心となるのは一、二年生で、上級生は長編を作るのだった。
　ぼくが二年生の夏、映画研究会の下級生たちは四泊五日のスケジュールで熱海に来ていた。メンバーのクラスメイトに熱海の旅館の娘がいたため、安く滞在することができた。
　撮影することになっていた短編は、当時の流行に乗ったホラーだった。しかし、極度の怖がりであるぼくは、その企画に乗り気ではなかった。実のところ、怖いのがいやで脚本さえ読んでいなかった。
　そのせいもあって、本来なら現場で中心となって動く二年生であるにもかかわらず、ぼくに与えられた役割は美術助手兼衣裳助手というものだった。言ってみれば雑用係だ。
　映画の内容を把握してないぼくは、出演者の身の回りの世話から買い出しまで様々な雑用を一手に引き受けさせられた。
　意味も分からないままボードをマジックで黒く塗りつぶしたり、荷物や機材を担いで旅館と現場を何度も行き来したりした。飲み物を調達しにも行ったし、弁当の注文を取るのもぼくの役目だった。

2000年夏 小田完哉 19歳「ホラーな恋、自主映画製作の現場で」 2

一年生の和田希美は、演劇サークルから助っ人で来てもらった女優の卵だった。
彼女は、ホラー映画に不可欠な絶叫シーンを演じることになっていた。透き通るような白い肌をした、大きな瞳と筋の通った形のいい鼻の持ち主だった。まさに適役だった。
ところが、撮影は初日からつまずいた。原因は和田希美だった。
映画出演がはじめてだった彼女はひどく神経質になっており、期待されていた絶叫シーンで声がかすれてしまったのだ。何テイクやってもＯＫが出ず、彼女の喉は萎縮してついに声が出なくなってしまった。現場に暗雲が漂った。
ぼくの出番だった。キャストを励まして気持ちをほぐしてやるのもぼくの役目だった。スケジュールには余裕がなく、責任は重大だった。

控室代わりにしていた町角の待合所で、ぼくは彼女と二人にしてもらった。
少しでも不安を和らげようと、まずは冷たい飲み物を用意し、団扇であおいでやった。そうしながら彼女の演技をほめた。ルックスもほめ、人柄までもほめた。
彼女は次第にリラックスしていった。肩が凝るというので、ぼくはそれをもんでやった。足がむくむというので、マッサージしてやった。その間にももっととほめ言葉をねだるので、持てるボキャブラリーを駆使してほめてやった。
気がついてみると、彼女はすっかり信頼しきった様子でぼくにしなだれかかってきていた。
「なんだか、怖い」彼女がかすかに震える声で言った。
ぼくはここぞとばかりに彼女を抱きしめた。そして、彼女の導師となって言った。
「大きな声で叫ぶには、自分を解放しなければなけない」
「できないの」彼女が正直に言った。「プレッシャー？　それとも照れがあるせい？」
「おそらく、その両方だろうね」ぼくはそっと彼女の手を取って言った。
彼女はぼくの手を握り返した。そうすることで自分の問題を受け入れたことを示したのだ。
「どうしたらいいの？」彼女は不安げに言った。
彼女の命運はぼくにかかっていた。
「もしぼくが、自分を解放する手助けをしてあげると言ったら？」
ぼくは、そこまでするのは越権行為と承知しつつも言った。映画の撮影現場ではよくあることだった。

「あるメソッドを知ってるんだ」ぼくは提案した。
「お願い」彼女は言った。「私、解き放たれたいの」
　その言葉はぼくを大いに奮い立たせた。

　彼女を連れて急いで旅館に戻った。そして、二人きりで部屋にこもった。
　ぼくは素早く布団を敷くと、余計な雑念を払うためと言って部屋を暗くした。そして、その方がリラックスできるからと、彼女に下着姿になってもらうように頼んだ。
「どうして？」彼女はわずかにためらった。
「必要なんだ。どうしても」ぼくは説得力に満ちて言った。
　彼女は真剣なまなざしでぼくの顔を見てうなずいた。ぼくは準備ができるまで彼女に背を向けた。
「これでいい？」彼女が言った。
　振り返ったぼくは、思わず「おぉう」と低く唸った。息を吹き込まれた白いマシュマロがそこに立っていた。
「何かいけなかった？」
「いや」ぼくは慌てて首を横に振った。「ちょっと消化がね。お昼に食べた卵サンドがよくなかったかな」ぼくは適当にごまかした。
「大丈夫？」
「ああ」そして改まって言った。「では、これからメソッドをはじめます」
「それって、何かいやらしいことじゃないわよね？」彼女が疑惑を捨てきれずに言った。
「まさか」ぼくは否定した。「演技の神に捧げるマッサージだよ」
　彼女は納得し、言われた通り布団に横になって目を閉じた。
　ぼくは、全身の神経を指先に集中し、オーラを高めた。そして、自意識に縛られた魂を解放すべく、肌に触れるか触れないかのところで、彼女の膝小僧を撫でた。
「あ」彼女から声が漏れた。
「いいぞ」ぼくは執刀医のように冷静に言った。
　出だしとしてはまずまずだった。ぼくはその調子で彼女の全身を撫でまわしていった。まずは毛並みにそって、それから逆毛に。やり方は心得ていた。
　最初のうちは、彼女からは吐息がもれるだけだった。しかし、ぼくのある種の演技指導によって、彼女は次第に声を出しはじめた。
　遠慮がちだった声は、やがて少しずつ大きくなっていった。それはあえぎになり、うめきになり、ついにはあらゆる計器がメーターを振り切って、絶叫に達した。
　しかし、ぼくはまだそれくらいでは手を緩めるつもりはなかった。
「その感じを掴むんだ」

　そう言ってメソッドを続けた。
　彼女はひぃひぃ言って何度もうなずいた。
　指先ひとつでダウンを奪えるポイントは見つけていた。あとはこっちのものだった。絶叫は鳴りやまず、ぼくの耳はガンガン鳴った。

「きみはもう、絶叫マスターだよ」
　ひとしきり施術を終えると、ぼくはくたくたになりながら言った。
「まだ」意外にも彼女は言った。「まだダメ」
「ダメ？」
「もう少しで何か掴めそう。もう一回、最初から指導してくれる？」
　彼女はそう言ってしなだれかかってきて、もう一回とねだった。
　やり方は心得ていた。ぼくは手を抜かなかった。じっくり時間をかけて、ゆっくりと、ときに激しく攻め続けた。そして、彼女の声が人間の耳が聞き取れる最高周波数にまで達したところで、ついにフィニッシュを決めた。
　精も根も尽き果てたぼくは、神が我にこの黄金の指を与えたもうたことに感謝を捧げた。
　すると、彼女はまたしてもしなだれかかってきて言うのだった。
「もう一回」
　ぼくはとことん付き合う覚悟を決めた。
　演技指導も楽じゃなかった。ぼくは左右で十本ある指を一本ずつ、すべて腱鞘炎寸前になるまで酷使した。彼女は十二の音階すべてを使って、それぞれの音で長調と短調の色分けをして、絶叫をあげることが可能になった。
　訓練は深夜遅くにまで及んだ。絶叫は完璧となった。

　翌日からの撮影は快調に進んだ。
　物語の主な舞台である廃墟となったホテルに、和田希美の絶叫がこだました。ぼくは、今や聞き慣れて心地よささえ感じるその叫び声にうっとりと耳を傾けながら、ささやかではあるが自分もこの映画に貢献できたと充実した気分に浸った。

その夜、ぼくはカメラマンの谷崎にビーチに呼び出された。
谷崎は監督志望の一年生だった。見栄っ張りで生意気な後輩で、現場で頭にバンダナを巻いているのがどうにも好きになれなった。
奴は砂浜で待ち受けていた。その場で足踏みをしながら上体を苛立たしげに揺らし、荒んだ目つきでぼくを睨むように見るのだった。お土産に何を買ったらいいかこっそり相談したいというわけではなさそうだった。
「酔ってるのか？」ぼくは訊いた。
「関係ねぇ」彼は吐き捨てるように言った。
事と次第によってはおおいに関係あるような気がしたが、落ち着いて考えている余裕はなかった。
「女優に手を出すな」谷崎は少しも後輩らしさを見せることなく言った。
もちろん、和田希美のことを言っているのだった。彼女がぼくを導師と仰いでいることを奴が面白くなく思っているのは、現場でも感じていた。
「ぼくたちはメソッドを試しただけだ」ぼくは説明した。「リラックスしていい気分になれるんだ」
「テメェ、殺す」谷崎は言った。彼はオブラートに包んだ表現を好む方ではなかった。
「それは、けけけけけ、警告なのか？」ぼくは怖いと感じていることを悟られないように言った。
「警告だ」谷崎は即答した。
「こっちは先輩だぞ」ぼくは自分の優位を指摘した。
「現場に先輩も後輩もあるかよ」谷崎は鼻であしらうように言った。
この男は今でこそアートフィルムがどうとか言っているが、もとはといえばマーシャルアーツ映画ファンで、自身も少林寺拳法をやっていたという。中学や高校の頃には、映画で見た技を同級生に試してよく怪我をさせていたなんて話を得意げにするような奴だった。
ぼくがやっていたのはアマチュア無線とソフトボールだけだった。どちらもたいした腕前ではなかったし、アマチュア無線でもソフトボールでもいつも怪我をさせられる方だった。どう見ても分が悪かった。
それでも簡単に引き下がるわけにはいかなかった。
「ぼくのおかげで彼女は絶叫をものにした。とやかく言われる筋合いはない」
ぼくはそう言って突っぱねたが、態度とは裏腹に膝はがくがくと震えていた。ナイフ

でも仕込んでくるべきだったと後悔した。
　谷崎は、秋に自分で監督するつもりの自主映画に、和田希美を主演で起用するのだと言った。だけど、そんなことは理由にならなかった。ぼくには分かっていた。奴は和田希美に気があるのだ。それで彼女がぼくのメソッドを受けたことが許せないのだ。つまりは嫉妬だ。
「それこそ関係ない」ぼくはまたしても突っぱねた。
「うるせぇ！　ある！」谷崎は怒鳴り散らした。
「ないと思うけど‥‥‥」ぼくはいくらか自信を失ってぼそぼそと言った。
　谷崎が突然逆上して掴みかかってきた。
　すっかり縮み上がっていたぼくは、押されるままに後退し、ついに勢いに負けて砂浜に押し倒された。谷崎も上からのしかかるようにして倒れ込んできた。
　そのとき、運の悪いことに、谷崎は砂浜に半分埋まっていたビール瓶に顎を思い切りぶつけたのだった。ごんと鈍い音がして、奴は顎を押さえて砂浜をのたうちまわった。

　ちょうどそこへ和田希美が駆けつけてきた。
　谷崎は涙を流して助けを求めていた。ぼくは無傷だった。彼女は状況を見て取ると、谷崎のもとに駆け寄った。そして、身体を起こして傷を見てやった。
「こいつがいきなり‥‥‥」ぼくは事情を説明しようとした。
　和田希美は冷たい目でぼくを睨みつけ、有無を言わせず言った。
「暴力ふるうなんてサイテー」
　彼女の声が、夜のビーチとぼくの頭の中に響き渡った。
「ぼ、ぼくは何も‥‥‥」
　弁解しようとしても無駄だった。彼女はぼくに背中を向け、何一つ聞き入れようとしなかった。一瞬にして、導師からサイテー男に格下げだった。
　彼女はしくしくと泣く谷崎を脇から支えて立たせると、二人で身を寄せ合うようにして去っていった。
　ぼくは一人で砂浜に取り残された。

　残りの撮影は、ぼくは現場からはずされた。
　仕方なく一人で旅館に残り、みんなの衣類や撮影に使った衣装を洗濯したり、機材の手入れをしたりした。スタッフやキャストは疲れて帰って来ると、ぼくがみんなの私物に手をつけたりしてないかチェックした。マッサージ希望者は、ぼくに指一本触れさせようとしなかった。

完成した短編は、予定通り学園祭で上映された。
残念ながら評価は芳しくなかったが、内容とは関係ないところで思いがけず話題になった。
誰かが、ある場面にぼんやりと人影のようなものが写りこんでいると言いはじめたのだ。撮影場所となったホテルで亡くなった人の霊ではないかと噂が立ち、それは狭いキャンパス内であっという間に広まった。映画には回を追うごとに人が詰めかけ、最終的にはヒットとなった。
真相を確かめるため、ぼくは意を決して最終回の上映に駆けつけた。
極度の怖がりであるぼくだったが、自分が関わった映画となれば怖さも多少は薄らいだ。それがどのようにして作られたか、ある程度分かっていたからだ。
映画のあらすじはこうだ。
舞台はある海辺の町。そこでは夜ごと浜辺に幽霊が出ると噂されていた。そんな中、地元住民や観光客が相次いで謎の失踪を遂げる。事件の取材で町を訪れたルポライターは、町はずれにある今は廃墟となったホテルで、過去に陰惨な殺人事件が起きたことを知る。どうやら失踪事件とその殺人事件には何か関係があるらしい。彼女は真相を究明すべくそのホテルへ向かうが‥‥‥。
脚本はご都合主義的で、恐怖演出は空振りしていた。全体的に不気味なサウンドでごまかしているような作りだった。

問題のシーンは映画の半ばを過ぎた辺り、和田希美演じるルポライターが初めてそのホテルに足を踏み入れるところだった。
その場面にさしかかると、客席に緊張が走った。ぼくも思わず座っていたパイプ椅子の縁を両手でぐっと掴んだ。そして、冷や汗をかきながら画面に目を凝らした。
途端にすべてがはっきりした。
何ともあっけない話だった。
幽霊だと噂されていた人影は、ぼくだった。撮影中にフレームの外で待機していたぼくの姿が、フレーム内にあったガラスに反射して映りこんでしまっていたのだ。
何も知らない観客たちは、画面にぼくの姿を発見すると一斉に悲鳴を上げた。
ただ一人、ぼくだけが冷静だった。ぼくだけがその正体を知っていた。ぼくにとって、観客たちの悲鳴はほとんど快感となった。
周囲を見渡すと、客席に和田希美と谷崎が並んで座っているのを見つけた。彼らも自

分の目で確かめに来たらしかった。二人が本気で怖がって顔を引きつらせているのを見て、ぼくは一人ほくそ笑んだ。映画というもののからくりが分かったような気がした。

　真相は誰にも話さなかった。

四話につづく

第四話
「サードギターの男」　2003年冬 宮地沙悠里 20歳

　初めて男と二人で旅行をしたのは、二十歳のときだった。
　一緒にいられるなら行き先なんてどこでもよかった。思いつくまま土地の名前を挙げていって、これといった理由もなしに熱海に行くことになった。
　八つ年上の彼とは、付き合いはじめて半年が過ぎていた。彼はギタリストで、大学の友だちに連れられて行ったライブハウスで知り合ったのだった。
　四ヶ月が過ぎたある日、ふとしたことから彼が実は結婚していたことが分かった。
　全身から血の気が引いた。知らなかったとはいえ不倫をしていたのだ。
　最初はこんな関係とても続けられないと思った。でも、結局そのせいで余計にのめり込んでしまったのだった。大学の勉強なんてバカバカしかった。カフェのバイトもやってられなかった。恋以外、することなんてなかった。私はどこかで捨て身だった。
　私が不幸な女を演じてはまっている様子を見て、彼も図に乗った。私のことを「愛人一号」と呼んだりした。タバコもお酒も音楽もセックスも、全部この男に教え込まれた。そのときの私は、これ以上人を好きになることなんてないと思っていた。
　彼がステージで演奏しているところは、一度も見たことがなかった。実のところ、彼の担当はサードギターだった。
　音楽のことなんて何も知らない私は、わけも分からないままギターが弾けるなんてすごい、かっこいいと思っていた。でも、よく考えたらサードギターがすごいわけがなかった。だいたいギターが三人もいるバンドなんて、それまでもそれからも聞いたことがなかった。彼はギタリストとしてお呼びじゃない奴に違いなかった。
　今になって振り返ってみると、彼が大人の男に見えたのは、ただのだらしのなさをそう勘違いしただけだった。どこか謎めいて見えたのも、単に結婚していることを隠していたからに過ぎなかった。嘘つきのろくでなしだった。おまけに、稼ぎもろくになかった。
　それでも私は尽くす女だった。せっせと身の回りの世話を焼き、デートのときにはお弁当を作っていった。会うたびにお金も貸した。彼はほめ上手で、私は簡単に乗せら

れた。なんてバカな私だったことか。

2003年冬 宮地沙悠里 20歳「サードギターの男」 2

冬の熱海の町のうらぶれた雰囲気は、彼にぴったりだった。

男は私を秘宝館に連れて行った。二人で手をつないでいやらしいものを見ているうちに、なんだかいやらしい気分になってきた。

途中で何度かキスをするために立ち止まりながら、たまたま通りかかった旅館に入った。どこにも予約は取っておらず、すべて成り行き任せだった。私たちは、まだ日があるうちから畳の上で激しく求め合った。

そのあと大浴場で温泉につかって、部屋で食事をすませた。それから、仲居さんが布団を敷きに来るよりも前に、海が見える窓際の椅子の上でもう一度した。

私たちはまた温泉に行った。プライベートの露天風呂があるのを見つけ、彼と二人で入った。夜になって外気は冷え込んでいた。湯船で寄り添っているうちに気分が出てきて、お風呂の中で身体を重ねた。水がぴちゃぴちゃはねる音が、気分を大いに盛り立ててくれた。

部屋に戻ってくると布団が敷かれていた。くたくたになった私たちは、倒れるように身体を横たえるとそのまま眠ってしまった。やがてどちらが先ともなく目を覚ますと、まだ日付が変わって間もない時間だった。

まどろみながらキスをしたり、お互いの身体を撫でたりした。いつしか浴衣はすっかり脱げてしまい、私たちは夜が更けるまで激しく愛し合った。もう明日なんか来なくてもいいような気持ちだった。

　ようやく二人の身体が離れて、まだ呼吸が整いもしないうちのことだった。男が前触れもなく言った。
「終わりにしよう」
　何を言い出すのかと思った。だけど、いつかそういう日が来るということは私にも分かっていた。
「しないよ」
　愛人だからといって簡単に引き下がるつもりはなかった。それでも男がついに決断に踏み切ったということが、私を激しく動揺させた。
　今のままの関係がいつまでもずるずる続けばいいと思っていた。それでよかったし、それ以上は望まなかった。ろくでもない男だと分かっていても、好きだった。しかし、男の次の一言によって、私は谷底に突き落とされたような気持ちになったのだ。
「他に好きな人ができた」
　男は臆面もなく言った。
　それは奥さんでもなく、私でもない、別の女を好きになったということだった。
「愛人二号も作るんだ」私は呆然となって言った。
「二人は無理だ」彼が正直に言った。
「三人でしょ、つまり」奥さんを入れればそういう勘定になった。
「まぁそうだな」彼はしぶしぶ認めた。
「奥さんと別れれば」私は冷たく言った。
「それじゃあお前、愛人が愛人じゃなくなるだろ」彼が罪と言ってもいいほどの無神経ぶりで言った。
　彼の中ではあくまで奥さんが一番なのだと悟った。しかも、二番は新たに好きになったとかいうその女なのだ。そうすると必然的に、私は三番目ということになった。
　三番目なんて屈辱には、何があっても絶対に、耐えられなかった。
　この男はこんな話をするつもりでいたくせに、私を秘宝館みたいなところに連れて行ったのかと思った。バカバカしいのと悲しいのとが入り混じって、言葉が出なかった。だいたい、「他に好きな人ができた」なんて、どうしてこんなときばっかり真っ向勝負をしてくるのかが分からなかった。
　だけど、一度好きになってしまったものが、私の力でどうにか変えられるはずがなかった。私はしゃくりあげて泣いた。裸のまま、女の子みたいにわんわん声をあげて泣いた。そんな風に泣けるなんて、自分でも知らなかった。

「泣くなよ」
　男はそう言って私の頭を撫でて慰めた。
　そんな風にされて、どうしてか彼を優しい人だなどと思ってしまった。その優しさが身に沁みて、いっそう涙が出て止まらなかった。

第五話につづく

第五話
「中華料理屋でさようなら」　2009年冬 小田完哉 28歳

　新幹線の切符は浜松まで買ってあったので、熱海で降りるなんてまったく予定外のことだった。彼女が急にその町を観光したいと言い出したのだ。まだ一度も見たことがないからと。
　彼女はぼくの婚約者だった。四歳年下の会社員で、小柄でリスのようにかわいくて、そしてわがままだった。交際期間はまだ半年に過ぎなかったが、結婚願望の強い彼女に迫られて籍を入れることに決めたのだった。
　ぼくたちは浜松にあるぼくの実家に向かう途中だった。結婚の挨拶をしに行くことになっていたのだ。春には式を挙げるつもりだった。何しろ若くてかわいらしい奥さんだから、みんなが羨ましがった。
　ともかく、彼女が一度言い出したら聞かない性格だということは、半年の付き合いでもよく分かっていた。彼女が降りると言ったら、降りるのだ。
　幸い、実家に行く前にぼくが生まれ育った浜松の街を見て回るつもりでいたから、時間には余裕があった。それが熱海になったと思えばよかった。浜松を見る機会はこれからいくらでもあるだろう。ぼくらは熱海で降りた。

2009年冬 小田完哉 28歳「中華料理屋でさようなら」2

　朝早く東京を出たので、午前もまだたっぷり残っていた。
　正月気分もそろそろ抜けてきた熱海の町は、それでも観光客が大勢いた。彼女は通りや商店街をはしゃぐようにして歩き回り、やたらと土産物を買い込んだ。
　ひとしきり観光を楽しんだあと、ぼくたちは川沿いに見つけた中華料理店で昼食をとることにした。
　ぼくは坦々麺を、彼女は八宝菜を注文した。料理が出てくるのを待つ間、ぼくらは商店街をあげてやっていた新春キャンペーンのスピードくじを試してみることにした。携帯で指定のＵＲＬにアクセスして、空メールを送るだけでよかった。
　結果はすぐに返信されてきた。ぼくはハズレだった。彼女は三等が当たった。思いがけない幸運に、ぼくたちはわずかながら気分が高揚した。
　店の人に知らせると、その場で景品を渡してくれた。瓶入りのジュースが一本だった。説明によると、地元熱海で採れたみかんを絞って作った一〇〇％ジュースだという。
　なんともささやかなものだったが、それでもぼくたちは喜んだ。
「結婚して何年かしたら、このことを思い出す日が来るだろうね」
　ぼくは他愛ない冗談のつもりで言った。彼女は黙って肩をすくめただけで笑顔は見せなかった。おやと思ったが、はしゃぎ回って疲れたのだろうと考えることにした。
　やがて、注文した料理がきた。すると、現物を見た彼女は、自分で注文した八宝菜よりぼくが注文した坦々麺の方がいいと言い出した。一度言い出したら聞かない彼女だった。ぼくらは皿を交換した。
　彼女が坦々麺を分けてくれるそぶりもなく食べるのを見ながら、ぼくは漠然とした不安にとらわれている自分に気がついた。

　その不安は的中した。食後にお茶を飲んでいるとき、彼女が出し抜けに言ったのだ。
「他に好きな人ができたの」
　間があった。
　ぼくは理解できずに「え？」と訊き返した。
「だから結婚できない」彼女が言った。
　冗談を言っているのではなかった。だいたい、彼女は冗談が得意ではなかった。
「それは無理だ」ぼくは慌てたように言った。「どう考えても無理だ」
「ゴメンね」彼女は謝った。
　ぼくは受け入れるわけにはいかなかった。
「もうみんなに言っちゃってるんだぞ。友達にも、会社にも、うちの親にも、きみの親にもだ」
「私はまだ言ってない」
「そんなこと知らないよ！」ぼくは思わず大きな声で言った。向こうのテーブルにいた客たちが、何事かとこちらを振り返ったのが気配で分かった。
「うちのお父さんは、お前の心に従えって」
「話したの？」ぼくは少し声を落として言った。「ぼくに言うより前に？」
　彼女は黙ってうなずいた。
「心に従え？」
　ぼくはおうむ返しに言った。そんな陳腐な言葉は聞いたことがないように思われた。
「カンちゃんのご両親には会えない」
「それで熱海が見たいなんて言い出したのか」ようやく事情が飲み込めて来た。「変だと思ったんだ、あんなにはしゃいでるから」
「ゴメンね」
「でもダメだ」ぼくは何度も首を振って言った。「これから浜松に行ってうちの親に会うんだ」
「私は私の心に従うことにしたのよ」
「いいや」ぼくはきっぱりと言った。「きみはきみの心に従わない。ぼくに従うんだ。ぼくたちは結婚する。ぼくはきみの夫になるんだ」
「結婚できないの」彼女は意見を曲げなかった。
「きみの心は当てにならない。八宝菜を食べたいって言ったのに、すぐに坦々麺の方がいいって言い出す心だぞ」

「バカにしてるの？」彼女が眉間にしわを寄せて言った。
「してないさ」ぼくは否定して言った。「きみこそ今になって結婚できないなんて、完全にぼくをバカにしてるじゃないか。それが、中華料理屋で言うことか？」
「カンちゃんって、ちょっとバカなところあるよね」
「何？」ぼくは驚いて言った。
「頼りなく見えるの、ときどき」
　ぼくは、まるで阿呆のように口をぱくぱくさせるばかりで何も切り返せなかった。
「私だって悩んだんだから。でもカンちゃんが結婚が決まって嬉しそうだったから」
「もともときみが言い出したことだ」ぼくは彼女に事実を思い出させた。「きみが強く望んだんだ」
「だから謝ってるじゃない」
「そんなわがまま許されないぞ」
「他に好きな人ができたのよ」
　彼女はそれが最もぼくにダメージを与える言葉であることを知りながら、情け容赦なく繰り返した。彼女が口を開けば開くほど、ぼくはぼろぼろになっていくようだった。
「他に好きな人ができたの」彼女は追い打ちをかけた。
「どこのどいつなんだ」ぼくは歯ぎしりしながら言った。
「それは関係ないじゃない」
「ある。誰なんだ」
「いいでしょ」
「ぼくより頼りがいがある男ってわけか。そうなんだろ」ぼくは彼女を睨みつけるようにして言った。
「聞いてどうするの」彼女はぼくの質問には答えなかった。
「知りたいんだよ」ぼくはしつこく食い下がった。それでどうするのかなんて、自分でも分かってなかった。
「言えない」
「どうして」
「どうしても」
「なんで」
「なんでも」
「ぼくの知ってる奴か」
　友人や同僚や上司が彼女を寝取ったという、最悪の事態が頭をよぎった。
「そうじゃないけど、とにかく言えない」

　彼女は否定したが、どこまで信用できるか分かったものではなかった。いずれにしろ、いくらこんな話をしたところで埒が開きそうになかった。
「君の心に従ってるわけか」
「そう」
「ぼくの、こ、こここここ、心はどうなる」ぼくは心という言葉を口にすることにひどく抵抗を感じて、思い切りつっかえた。
「ごめんなさい」
「それだけ？」ぼくは自分の中で何かが音を立てて崩れていくのを感じながら、自分でも何を言っているのか分からずに言った。
「半年付き合って、結婚することになって、これからってときに？　もうみんなにも知らせてあるし、指輪も注文してあるだろ。それなのに、きみに好きな人ができたからって……」
「ごめんね」彼女は最後の最後まで意見を曲げようとしなかった。
「謝れば済むのか？」ぼくは完全に打ちのめされていた。
「他に言いようがないもの」
　どうにもならなかった。彼女は他に好きな男ができて、もうぼくのことを好きではないし、結婚する気もなくなっていたのだった。

口論の末、彼女は中華料理屋から出て行った。
ぼくは体中から力が抜けて、しばらくその場から動けなかった。
彼女がいた席には、くじで当たったみかんジュースが残されていた。その脇には、まだ勘定を済ませていない伝票が裏返してあった。
それ以外、何も残らなかった。

第六話につづく

第六話
「女友達には内緒にしたい大学の先輩のこと」　2009年秋 宮地沙悠里 27歳

　大学を卒業して最初に勤めた会社で同僚だった祥子と映利子との付き合いは、今でも続いていた。典型的な親族経営だったその会社は、これまた典型的な二代目のお坊ちゃまくんがしでかした資金横領事件のせいであっけなく潰れてしまった。入社して三年も経たないうちの出来事だった。
　私たち三人は今では別々のところで働いていた。祥子は医療事務、映利子は百貨店の販売、私はデザイン事務所の事務の仕事だ。
　三人とも男がいないわけじゃなかった。でも、男といるより女友達と一緒にいる方が楽しかった。それが私たちの本音だった。
　三人で会うといつもどこかにいい男はいないかとグチり合った。右を見ても左を見ても、ろくな男がいなかった。私たちは二十七歳で、ときどきわけが分からない焦りに駆られることがあった。
　このまま一生結婚できないんじゃないかとか、このまま理想の男に出会うことなく終わるんじゃないかとか、このまま子供を産めないんじゃないかとか、このままぶくぶく太っていく一方なんじゃないかとか。
　いい男が見つからないのは、私たちがいい女じゃないからだという結論に達することがあった。そんなはずはないともう一度頭から考え直してみても、同じ結論に達した。面白くなかった。
　私たちはみんな酒飲みで、口が悪く、下ネタが好きだった。三人で居酒屋なんかで盛り上がっていると、ときどき他の客から白い目を向けられることがあるのに私は気がついていた。
　私たちの下品ぶりは、年とともに悪化しているようだった。私たちは、一致した意見として、これも世の中にろくな男がいないせいにすることにした。
　この世のどこかに、私が酔いつぶれてヘソを出しながら寝て、鼾をかくと同時にオナラをしても、かわいいと言ってくれる男がいるはずだった。そんな歌があったはずだ。ないか。じゃあ誰かが作れよ。

2009年秋 宮地沙悠里 27歳「女友達には内緒にしたい大学の先輩のこと」2

　秋の連休、私たちは予定を合わせて熱海に来た。
　行きの電車の中ですでに缶ビールを一本空けていた。ゆっくり温泉に入って、夜通し飲むつもりだった。
　もちろん、いい男が見つかれば話は別だ。でも、熱海にそんな期待はしていなかった。だけど、それでも万が一ということはあるという程度には、それぞれ期待していたに違いなかった。
　しかし、商店街を冷やかしながら海まで来たときには、この観光地には胸がときめくようないい男はいないと私たちは確信していた。
　すれ違う男といえば、若いが少しもかわいくない女といちゃつく頭の悪そうな男か、イケてない男子大学生のグループか、こっちがどんなに酔いが回っていようと願い下げのオタクか、さもなければ年寄りだった。この世のどこかで、いい男だけが参加しなければならない戦争でも起きているらしかった。
　自棄を起こした祥子と映利子は、秘宝館に行くぞと息巻いた。それは町外れの山の頂に見えた。二人は、なんならそこで出会った男にモーションをかけてもいいというのだった。景気付けにもう一本空けそうな勢いだった。
　私は気乗りしなかった。そこにはいい思い出がなかったからだ。かといって、昔の男との事細かい思い出をこの二人に披露するような真似もしたくなかった。
　私はカメラを取り出した。
「私はいいや。これ試さないと」
　それは手に入れたばかりの一眼レフだった。仕事で写真を撮らなければならない機会が色々あって、ついに奮発して買ったのだ。中古で。
　私だって自分のキャリアについて何も考えてないわけではなかった。
　勤め先のデザイン事務所は小さなところだった。人手が足りなくなると、事務の私も現場に駆り出されることがしばしばあった。写真撮影に立ち会ったり、自分でシャッターを切ったりしているうちに、私は写真に興味を覚えていた。
　カメラを覚えれば仕事に役立ったし、もしかしたらそこから仕事の幅が広がることだって考えられた。
「なにー」祥子が言った。
「裏切りものー」映利子が言った。
「いい男がいても教えてあげないから」二人が口々に言った。
　二人はぶつくさ文句を言いながら、結束を固めて秘宝館に向かった。

2009年秋 宮地沙悠里 27歳「女友達には内緒にしたい大学の先輩のこと」3

　私は一人町中に戻り、商店街や路地を歩きながら惹かれた風景を写真に収めていった。
　ある路地の奥まったところに、狭くて急な石造りの階段を見つけた。駅と海を結ぶ近道のようだったが、下の土地と上の土地を無理やりつないだ感じだった。その趣が気に入って、階段をのぼりながら、階段自体やそこから見える風景を撮っていった。
　中ほどでうしろを振り返ると、家々の屋根の向こうに海が広がっているのが見えた。フレームの中で屋根と海と空とをバランスよく分け、シャッターを切った。
　向き直って上方の階段口を撮ろうと狙いを定めていたそのとき、脇からふいに男性が現れた。見覚えのある顔だった。あっと思って目をはずしたが、階段口を横切って消えていく後姿が一瞬見えただけだった。
　大学の先輩だった。親しいわけではなかったので名前は忘れてしまったが、周囲からこーちゃんと呼ばれていたことはかろうじて覚えていた。気のせいか、ファインダーの中の彼は泣いているように見えた。
　すると、彼が後ろ歩きに戻ってきて階段口にひょいと顔を出した。目の端に見覚えのある人を見た気がしたので確かめてみるという感じだった。
「あー！」彼は突然、驚いたように声を上げた。「さゆりん！」
　そんな風に呼ばれて私の方こそ驚いた。まさか向こうが覚えているとは思わなかった。学生のとき以来だったし、直接話したこともあったかどうかという程度の関係に過ぎなかったからだ。
　私が一年生のとき、こーちゃんと呼ばれていたこの人は四年生だった。同級生で仲の良かった菊池実沙子が、彼と付き合っていたのだ。
　彼について次から次へと女に手を出すという悪評を聞いていた私は、友人にあんな男はやめておけと何度となく忠告したのだった。しかし、彼女はまるで聞く耳を持たなかった。当時、私はこの男のことをどこか憎たらしく思って見ていたのだった。
　彼は今でも学生当時とたいして変わらない風貌をしていた。若々しいと思う以前に、「こいつ、働いてねーな」と思った。はみ出し者特有の、どうにもしまりのない雰囲気があった。
「今何してるんですか？」
　再会の挨拶を交わしたあと、私は仕事のことを訊いたつもりで言った。
「それがさ、今彼女と別れたばっかりなんだよ」
　彼は何か違う意味にとって言った。
　とはいえ、泣いているように見えたのは、本当に泣いていたのかもしれなかった。彼

の目尻にはかすかに涙の跡があった。向こうはそれを隠すわけでもなく、逆にこちらが恥ずかしくなった。
　少ししょげ返ったように見えなくもない彼に、せっかくだしお茶でもどうかと誘われてうまく断ることができなかった。

2009年秋 宮地沙悠里 27歳「女友達には内緒にしたい大学の先輩のこと」4

　私たちはその場所から見えるところにあった喫茶店に入った。入口は狭いが、Ｌ字になったフロアの奥が思いのほか広く、落ち着いて座れる店だった。
　話を聞いてびっくりした。別れた相手というのは十五歳の高校一年生だというのだ。
　私は口に含んでいたコーヒーを噴き出さないように口元を手で押さえて飲み込み、げほげほとむせ返ってから動揺を隠せないまま言った。
「は、はっ、犯罪じゃないですかっ！」
　この男は外見だけでなく、中身も昔とたいして変わってないのかもしれなかった。さらに悪くなっていると言っていいかもしれない。
　私が十五歳の頃といえば、好きな人とちょっと目が合うだけでもどきどきで、付き合うなんてとてもじゃないが考えられなかった。ちょっといい感じになった高校の同級生の青木くんとも、結局何もないままだった。青木くん、今どうしているんだろう。
「いやー、そういうもんじゃないんだよね、男と女は」彼が言った。
　こいつに男と女の何が分かるのかと思って、ムカッとした。
「ふられたんですか？」私は不機嫌混じりに言った。
「いや、えーと、微妙だな。駅で別れましたね」
「そうですか」
「いい子だったよ」
「若いですしね」私はとげとげしく言った。
「さゆりんより一回りも下だ」彼はまるで今気がついたみたいに驚いたふりをして言った。
「うるさいですよ」
「そういえば実沙子ちゃん、元気？」彼はさらりと話題を変えた。
　大昔の話ではあるが、私と彼の共通の話題といえば菊池実沙子のことくらいしかなかった。とはいえ、彼女とはすでに在学中から疎遠になってしまっていた。
「もうずっと連絡とってないです」
　つまり、共通の話題はないようなものだった。
「そうだよな」彼はそんなもんだよなという調子でうなずいて、「三年前に会ったときは元気だったよ」と言った。
「会ったんですか？」私はまたしても本気で驚いて言った。会うなよ、タコ。「じゃあ訊かなくてもいいじゃないですか」
「でもそれ以来連絡とってないから」
「実沙子と私は同い年です」

　私は先手の先手の、そのまた先手を取って言った。
「三年前には今より三歳若かった」彼は面白がって言っているのを隠している、ということがこちらに分かるようにして言った。
　私は彼をきっと睨みつけた。
「冗談だってば」彼は笑って言った。それから私をまじまじと見て付け足した。「でも、思ってたよりずっと美人になったよね」
「私ですか？」
「昔に比べればってことだけど」
　一言多いけど、そんな風にほめられてうっかり嬉しくなってしまった。私はほめ言葉に弱いのだ。それは自分でも分かっていた。それがいつもトラブルのもとになるんだと自分を戒めているうち、行き過ぎて自己嫌悪に陥った。
　菊池実沙子にはあんな男はやめておけと言ったくせに、自分はといえば更に年上の男との不倫にはまって、結局捨てられたのだった。実沙子に連れられて行ったライブハウスで出会った男だった。彼女とは、そのときのゴタゴタで溜まったストレスをぶつけたりして、疎遠になってしまったのだ。
　菊池実沙子は、このこーちゃんとの短い付き合いが終わったあと、いい恋をしたと言っていた。しかし、私はあの不倫をいい恋だとは振り返れなかった。振り返っても、ただ虚しくなるだけの経験だった。この違いは何なんだろう。
「さゆりんてあれだよね、昔から自分の中でなんかギクシャクしてるとこがあるよね。うまく言えないけど」
　なんだかよく分からないけど、当たっているような気がして面白くなかった。よりによって、この男にそんなことを言われるというのが、ことのほか面白くなかった。
「まぁ多分、男運が悪いんだろうな」
「何でそうなるんですか」
　しかし、それこそ図星だった。私の最近の男事情はひどかった。
　つい先日も付き合って三ヶ月の二歳年下の男に、二股をかけられていたことが発覚したばかりだった。私が爆発して「何か言うことないのかよ！」ってすごんだら、縮み上がって「怖いっ」だって。
　社会経験が豊富だとはとても言えないが、おっとりとした優しい男だった。私が仕事で疲れているとマッサージしてくれたりもした。それなのに、そんなことしそうにない男に限って影でこそこそ悪さをしているというこの不思議。
　私は、そんなことをしそうにない男というのを念頭において選んだ自分にも気がついていて、そんな自分にこそ一番幻滅していた。

　そのとき、携帯がメールを受信した。「ちょっとすいません」と言って確認すると、祥子からだった。
「いい男見つけた」というタイトルで、写真が添付されていた。開いてみると、どでかい男の一物のオブジェに映利子がうっとりした顔で頬ずりしているところだった。
　そのあられもなさに、私は思わず吹き出してしまった。本文には「罰として今夜は寝かさないぜ。今から帰る。居場所教えろ」とあった。
「なに？」そう言って彼が覗き込んできた。
「何でもないです」私はあわてて携帯を隠した。
　私は友人二人と熱海に観光に来ていること、これからその二人と合流することを手短に話した。
「そうなんだ」彼は言った。「じゃあお邪魔だよね。オレ、行くわ」
　彼はすっと席を立つと、財布が入っているズボンの尻ポケットに手を回した。そこで何かを思い出したらしく、「あ」と言って手を止めた。
「ゴメン、おごってもらっていい？」
「え？」
「お金ないんですわ。手切れ金ですっからかん」彼はあけすけに言った。
「はぁ」何が手切れ金だよ。
「ごちそうさま。またね」
　私がはっきりと答えないうちに、彼はさっさと店を出て行ってしまった。
　借りるのではなく、私のおごりだった。誘ったのはあっちなのに。連絡先を交換するとか、そんなこともなかった。
　惜しむ気持ちも示されずにいなくなられて、癪なことに私は少し心残りを感じた。なんだか一方的に言いたいことを言われたような気がしたし、どこかで祥子と映利子に彼を紹介したかったようにも思った。
　なんだか気が抜けて席を立つ気がしなかったので、私は喫茶店の場所を二人にメールした。

　それから三十分もしないうちに二人がやってきた。エロいものを見てきて、祥子も映利子もさっきより活力に溢れているように見えた。
「女二人で行くところじゃないわ」祥子が言った。
「男、まるっきりいない」映利子が言った。「みんなカップルだし」
「だから言ったじゃん」祥子が言った。
「あんたが行こうって言ったんでしょ」映利子が言った。
「そうだっけ？」祥子が言った。
「そうです」映利子が言った。
　私は何も言わずにただ笑って聞いていた。
「いい写真撮れたの？」映利子が訊いた。
「まぁまぁかな」私は答えた。
　階段のところであの人がフレームの中に入ってきたとき、シャッターを切っておけばよかった。私はちょっとだけ後悔した。
　祥子と映利子には、大学の先輩にばったり会ったことは言わないでおいた。

七話につづく

第七話
「うまくいきそうで、うまくいかない」
2012年春 小田完哉 31歳 ／ 宮地沙悠里 29歳

昨夜の嵐が過ぎ去って、空はすっきりと晴れ渡っていた。
ある老舗和菓子屋の厨房から、饅頭をいくつも載せた大きな角盆を抱えた売り子の女が、つっかけに足を入れて暖簾をくぐって店の方へと出てきた。天気とは裏腹に、彼女の表情は晴れなかった。
陳列棚の前まで来ると、女はあっとなって立ち止まった。表にスーツ姿の男が歩いてくるのが目に入ったのだ。彼はまっすぐ店に入ってきた。二人は少し気まずそうに視線を交わすと、何を言っていいか分からなそうにうつむいた。
「昨日はひどい雨でしたね」男が言葉を探して言った。
「私、出られなくて……」女はすまなそうに言った。
昨夜、二人きりで会う約束をしていたのだった。しかし、急な嵐がやってきて、女は店の戸締まりや主人のまだ小さい子供たちの世話を言いつけられてしまい、一晩中身体が空かなかったのだ。
「あの嵐じゃしょうがない」男はそう言って弱々しく笑った。
「あの……」女が言いかけた。
「今日東京に帰るんです」男が言った。
「え」女はうろたえて言った。「来週までいらっしゃるんじゃ……」
「また娘の具合が悪くなってしまって」男が言いにくそうに言った。
「そうですか」女はそう言って目を落とした。
二人の間に沈黙が流れた。
土地開発の仕事で熱海をたびたび訪れていた男と、その和菓子屋に住み込みで働く女が出会ったのは、半年ほど前のことだった。それ以来、男はこの町に来るたびに店に立ち寄っていた。
男には東京に妻と病気がちな娘がいることは女も聞いていた。それでも二人は惹かれあっていた。昨夜、二人は会って想いを確かめ合うはずだった。
女が目を上げて何か言いかけた……。

「カット！」
　監督の指示を受けた助監督が、拡声器でカットをかけた。
　と同時に、張り詰めていた緊張が解け、脇に控えて演技をじっと見守っていたスタッフたちが一斉に動きはじめる。
　ここは映画の撮影現場だった。
　撮影は、物語の舞台となる熱海の商店街に実際にある、閉店して久しい土産物屋を借り切って行われていた。構えの大きなその木造の建物は、さほど手を加えずとも昭和三十年代後半という時代設定にマッチした。
　現場の片隅に、配給会社の社員でこの映画の宣伝を担当する小田完哉がいた。
　彼は、今主演俳優二人によって演じられたシーンや、現場の雰囲気を見て、少し安心感を得ていた。クランクインから二週間が経って、ようやく撮影が軌道に乗ったように感じたからだ。
　小田完哉は配給会社の一社員にすぎなかったが、この映画に関しては企画者という立場も兼ねていた。
　これは彼が何年も温めていた企画だった。まず最初に脚本があった。彼の知り合いの佐藤啓二という脚本家が数年前に書いたオリジナル作品だ。
　それを知り合いのよしみで読ませてもらって以来、敬愛する成瀬巳喜男の映画を彷彿とさせるその作品世界にすっかり惚れ込んでいたのだ。
　少し前に佐藤啓二が業界を去る決意をしたとき、小田完哉は映画化の見込みがゼロに等しかったその脚本を預からせてほしいと頭を下げた。脚本家はちらっと片眉を吊り上げてから、こともなげに「きみにあげるよ」と言った。
　それ以来、小田完哉は機会を見つけては、こんな企画があるんだけどと話を持ち出し、興味を持ってくれた相手に脚本を読ませて回った。そうやって協力者を増やし、出資者を探し、気がつけばプロデューサーのような仕事をやっていたのだ。
　普段宣伝担当としてこなしている以上の仕事を実質無償で引き受けていた小田完哉は、休む暇もないほどだった。今日もこのあとパンフレットの制作を依頼したデザイナーと、顔合わせを兼ねた打ち合わせをする予定になっていた。
　パンフレットの制作自体は経験があったから、現場仕事に比べれば心配は少なかった。にもかかわらず、打ち合わせを思うと気が重かった。原因は分かっていた。女だった。宮地沙悠里だった。

　宮地沙悠里、宮地沙悠里、宮地沙悠里……。
　彼は、不吉な予感がしてか、それともかすかに期待を込めてか、自分でも判別しかね

ながらその女の名前を呟いた。

　小田完哉に彼女を紹介したのは、島田デザイン事務所の島田だった。パンフレットの制作に当たって若いデザイナーを探していると相談すると、電話の向こうで島田は即答した。
「いるいる、ちょうどいいのが、いるいる」
「え、本当ですか？」
　すぐに見つかるとは期待していなかった小田完哉は喜んだ。いると言われると、どんな人かすぐに知りたくなった。
「それより完ちゃん、聞いてるよ」島田が唐突に、楽しそうに、話を逸らした。
「何です？」小田完哉は、島田の性格を思い出してはっと警戒した。
　この五十がらみの島田という男は、仕事に関して言えばやり手だった。それは間違いなかった。しかし、人の色恋沙汰に干渉することが生きがいという厄介な一面を持ち合わせていたのだ。
　なぜこの世の中で男と女がいつまでも賢くならず、同じような面倒ばかり起こすのかといったら、それは島田が互いの相性も考えず面白半分に彼らをくっつけようとするからに違いなかった。
「今、カノジョいないんでしょ」島田が、どう考えても楽しそうに言った。
「え、カノジョですか？」小田完哉が、とぼけようとして、音声案内のように抑揚のない声で言った。
「いないらしいじゃん」島田は、どう聞いても楽しそうに笑って、繰り返し言った。
「えーと、そうなんですかね」小田完哉は努めてあいまいに受け答えした。自分でもよく分からないのだが、そちらにはそんな話が行ってるんですねと、言外に多少の嫌味を込めていた。
「まだショックから立ち直れてないんだ」島田は嫌味などものともしなかった。
「いやー、どうですか」小田完哉は適当に笑ってごまかした。
　ショックというのは、三年前に彼が付き合っていた恋人から婚約を破棄された一件のことだった。結婚が決まったことを会社にも話していたので、当然婚約破棄されたことも知られるところとなったのだ。
　というわけで、しばらくの間彼は社内でいい笑いものになった。失礼なことに、彼の目の前で声を上げて笑う同僚も何人かいた。ある同僚は言った。「おい、こいつはお前が手がけた初めてのヒットじゃないか」
　この話は、社内に知れ渡るのとほとんど同時に、地獄耳の島田にも伝わっていた。ということは、今となっては全世界が知っているも同然だった。「見ろよ、婚約者に捨て

られた小田完哉があっちに歩いてくぜ」フラれて間もない頃、彼は街ですれ違うみんなが自分を後ろ指さして笑っているのではないかと不安に駆られたものだった。
　あのショックから立ち直れているのかどうか、小田完哉自身もはっきり分かっていなかった。半年ほど前のこと、彼はかつて一方的に婚約を破棄したあの女が、ついに別の男と結婚したという話を人づてに聞いたのだった。
　すると、彼女に未練があるわけでもなかったのに、彼はひどく落ち込んだ。そうやって落ち込んでみると、自分でも分かっていなかったが本当は未練があったのかという気にもなってきて、彼は酔った勢いで彼女に電話をかけた。しかし、番号はもう通じなかった。
　思いがわだかまって、彼はさらに酒を飲んだ。そうするとまた勢いがついて、今度は彼女の部屋に直接押しかけた。しかし、すでに引っ越したあとだった。
　そうとは知らずドアを叩いてわめいたり懇願したりしたので、恐怖におびえたその部屋の新しい住人に警察に通報された。彼はやってきた警官に連行された。
　小田完哉はあまり呑み込みのよくない警官相手に、裏紙に人物相関図まで書いて事情を説明したのだった。明け方、ついに話の全貌を理解したその警官は、同情を示したりはしなかった。ただ「もう行け」と言って彼を解放した。交番を出てしばらく歩いた小田完哉がふと振り返ると、その警官が路上で腹を抱えて笑っているのが見えた。
　いずれにしても、あの一件以来、小田完哉に決まった恋人がいないのは本当のことだった。とはいえ、それは仕事とは何の関係もないことだった。

「それで誰なんです？」小田完哉は痺れを切らして話を戻した。
「いい子、いるんですわ」島田はもったいぶって言った。
「デザイナーですよね」小田完哉は何の話か分かってるのか確認せずにはいられなかった。
「紹介してほしい？」
「えぇえぇ」
「一緒に仕事すれば、距離も縮まりやすいと思うんだよね」
「えぇえぇ」
「完ちゃんの、運命の女性」島田がまずその人の肩書きを述べた。
「エディトリアル・デザイナー」小田完哉が訂正した。
　それで紹介されたのが、島田デザイン事務所から先頃独立したばかりだというその女性、宮地沙悠里だった。
　島田は仲をとりもつ気満々だった。不思議なことに、そのくせ小田完哉の意向を訊きさえしないのだった。当然、宮地沙悠里の意向だって何も訊いていないだろう。島田はフリーの男とフリーの女を見つけると、まるで化学実験でも楽しむように、とにかくくっつけてみようとするのだった。
「うちの宮地、って言ってももう独立したわけだけど、ちょっと気が強いとこあるけど、どっちかっていうと美系だよ。仕事でもよく気がつくし、あれはいったん惚れたら弱いタイプだね」
「そうですか」
「男はいないらしい。多分いないな。絶対いない」伝聞が、推量を経て、断定になった。
「それは別にいいんですけど」
「完ちゃんとお似合いだと思うんだよね」
「どうでしょうね」小田完哉には島田が何を根拠にそう言っているのか分からなかった。
「付き合っちゃいなって」島田は、当の二人がまだ互いに顔も知らないうちから無責任に言った。「彼女にも話しておくから」
「いやいや、そんな、いいですって」
　今日の顔合わせにあたって、小田完哉は事前に宮地沙悠里本人と二、三通メールのやりとりをしていたが、仕事の用件以外の話は努めて避けていた。やはりと言うべきか、あちらも必要以上のことは何も言ってこなかった。

　島田のことは、仕事相手と最低限打ち解けるために「あの人もしょうがないよね」と笑い話にさせてもらえばいいかと彼は考えた。それでも、あらかじめそんな話をされていると思うと何も意識しないわけにもいかず、そのことが彼の気分を重くしているのだった。島田は、婚約破棄の一件だって当然喋っているに決まっていた。それがあの人の楽しみなんだから。

　そのとき、小田完哉は土産物屋の表がやけに騒がしいのを聞きつけた。悪い予感がした。
　気になって出てくると、またしても瀬田荘介だった。予感は的中だった。
「殴った！　殴ったぞ、この女！」
　瀬田荘介が自分の額をさすりながら、我が身に起きたことに仰天したように目を剥いて、周囲の人だかりにアピールするようにわめいていた。人だかりの中心には、この有名なベテラン俳優に対峙して少しも物怖じしない細身の女が、眉間にしわを寄せて仁王立ちしていた。
　小田完哉はちょちょちょと二人の間に割って入った。彼はまず瀬田荘介の怪我の様子を見た。後退した髪の生え際辺りが少したんこぶになっていたが、たいしたことはなさそうだった。
「殴ったんだ、この女が」
　瀬田荘介が改めて小田完哉に事情を説明するように苦々しげに言った。小田完哉は、もちろんこのベテラン俳優のわがまま処理係も引き受けていた。
「触るからでしょ！」
　細身の女がすかさず言った。そんなことだろうと思った。
　このベテラン俳優は、六十過ぎてなお女好きで有名で、現場でも手がつけられないほど好き勝手をやっていた。スタッフや地元の女性に手を出すわ、助監督を散々使い走りに使った挙句勝手にクビにしようとするわ、この二週間だけでも何件ものトラブルを引き起こしていた。小田完哉は、そのたびに事態を収拾すべく駆けずり回らなければならなかった。
　しかし、たとえ厄介の種であっても、このベテラン俳優は映画の完成に欠かせない人物だった。特に資金繰りの面でそうだった。制作費全体の約三割が、瀬田荘介と何らかのつながりのあるところから出資されていたのだ。
　おまけに、ここからほど近い小田原市出身の瀬田荘介は、熱海にも顔がきいた。映画は熱海市の全面的な協力のもとに撮影されていたが、その協力が得られたのも瀬田荘介のコネクションによるところが大きかった。
　総合的に考えると、小田完哉は瀬田荘介がどんなトラブルを起こそうとその尻拭いをしなければならなかったし、さらに彼の一番の味方であるようなふりもしなければならなかった。小田完哉としては、たとえ瀬田荘介に非があろうと、とにかく事を荒立てないようにうまく立ち回るしかなかった。
「謝れ！」瀬田荘介が感情を爆発させて叫んだ。

「なんで私が！」女が一歩も退かずに言った。
　小田完哉は事態が一触即発なのを見てとると、ちょちょちょと女に擦り寄って耳打ちするように言った。「きみ、とにかく謝って」
「は？　悪いのはこいつだって言ってるでしょ！」女はとりつく島もなかった。ベテラン俳優も「こいつ」呼ばわりだった。
「だだ、誰に向かって、ぶごがががごっ！」
　瀬田荘介がぶち切れた。演技ではなかったので、感情の抑制がきかずに、後半がよく聞き取れなかった。これはかなりまずいと、小田完哉も思わず慌てた。
「いいから、頼むよ」小田完哉は女に媚びへつらうようにして言った。悪いのは瀬田荘介だということも、不条理を押しつけているということも、百も承知の上だった。
「冗談でしょ」女はベテラン俳優を睨みつけていた目をはじめて小田完哉に向けた。
　唾棄すべきウジ虫野郎を見るときに女性がする目で刺すように睨まれて、小田完哉は思わずちびりそうになった。
　女は「ふん」と鼻息を吹き出し、くるりと背を向けてその場から憤然と歩き去った。

もちろん、その女は宮地沙悠里だった。

彼女は怒りに任せてずんずん歩いていた。

アスファルトに一歩ずつ足跡を刻みつけんばかりのその激しい足取りから、彼女の言わんとすることが分かるようだった。

あのスケベジジイ！　何がカメラを教えてくれだ。ちょっと有名人だと思って人の体にべたべた触りやがって。尻だけならまだいい。許してやらんでもない。ときどき触っちゃうことありますよねぇーで。でも胸はありえないわ。しかも指で突っつきやがって。

それから、あとから出てきたあのバカ！　その場しのぎしかできない低脳サラリーマン！　太鼓持ちの豚野郎！　どうして被害者の私が謝らなきゃいけないんだよ。冗談じゃない、まったく！　まったくまったく、まったく！

宮地沙悠里は、海に出る手前の道路で赤信号につかまった。行く手を阻まれた途端、彼女の中で何かがプチンと切れた。

宮地沙悠里はいきなり信号機の支柱を蹴飛ばした。一発、二発、三発。すぐにこれでは思うように力が入れられないと悟り、今度は鞄で右から左からなぎ払うように殴りつけた。五発、十発、十五発。信号機の支柱はもうひと押しで真っ二つに折れそうだったが、残念ながらそうなる前に宮地沙悠里の体力が切れた。

肩で息をしてその場に立ち尽くしていると、次第に己のしでかしたことが客観的に理解されてきた。そして、ことの重大さに思わずめまいを覚えた。

エディトリアルデザイナーとして独立してまだ半年にも満たない宮地沙悠里は、フリーランスとして仕事をすることの厳しさを早くも痛感していた。

フリーランスの仕事で何が大事かといえば、信用だった。信用がなければ、誰も仕事をくれない。しかし、と彼女は目の前が暗くなるのを感じながら考えた、相手を殴っておいて信用も何もあったもんじゃない。

当たり前だ。「デザイナーにしてはなかなかいいパンチをお持ちだと伺ってます。もしよかったら、今度うちの会社の事業案内のパンフレットを作っていただけませんか」そんなことを言う奴がいるもんか。……いるかな。いないいない。いませんよ。

あのスケベジジイが出演者の一人だということは分かっていた。直接の依頼主ではないが、関係者なのは間違いない。おそらく、中でもエラいとされる人物だろう。とにかく有名人だ。

こういう世界では、有名というのはエラいというのと同義なのだ。それも変だが、とにかくそうなのだ。こちらに分があるということなど関係なかった。立場の弱い者の言

うことなど考慮されないからだ。
　だいたい、現場に着いて早々に関係者を殴ったとあっては、依頼主に会わせる顔がなかった。小田完哉だ。

　小田完哉、小田完哉、小田完哉‥‥‥。
　なんかバカみたいな名前だけど。

　元上司の島田によれば、「さゆりちゃんの白馬の王子様」。ルックス、不明。年齢、おそらく私より少し上。性格、やや頼りなし。知性、並以下ではないらしい。周囲の評判、年下女に婚約破棄されたとか。これはちょっとウケる。将来性、映画の宣伝マン、まったくなくはないようだ。
　現時点での総合評価、十段階で……、いや、早急な判断はやめておこう。白馬だけの方がまだマシだったってことにならなきゃいいけど。
　というか、そんなこと言っている場合ではない。そうだ、こんな話を聞けば、島田だってもう仕事をふってくれなくなるかもしれない。大変だろうから仕事まわしてやったのに、あいつは恩を仇で返したぞ。人を殴ったとはね、関係者を。彼氏もいないのに。だっはっは。今度、格闘家とでも知り合ったら紹介してやろう。
　あぁもう。次第に、怒りより憂鬱が勝ってきた。あのスケベジジイが許せないことには変わりないが、もっと慎重になるべきだった。あんたことをしたとあっては、クビになる。なっても仕方ない。
　しかし、悔いても遅かった。彼女は現場からどんどん遠ざかって歩いていた。遠ざかれば遠ざかるほど、戻るのは難しくなるようだった。

「すいません、ちょっと！」
　海岸沿いを歩いていた宮地沙悠里を呼び止める声があった。
　振り返ると、先ほどのバカ男が走って追ってきていた。それを見て、また怒りがぶり返してきた。いかにも風采の上がらない男だった。背も低い。おまけに、なんか走り方が変。ぺしゃんこになるまで踏みつぶしてやりたい。
　それでも、この男も関係者に違いないと思い直し、宮地沙悠里は足を止めた。怒ってることを示した方がいいのか、先ほどのことは一生の不覚でございましたと後悔しているような顔をしたらいいのか、分からなかった。
　男は彼女の前まで来ると、息を切らせながら言った。
「もしかして、宮地さん？」
「え」宮地沙悠里は思わず返事に詰まった。自分の名前を知っている者が、あの現場に何人もいるはずがなかった。まさかと思って目の前が暗くなるのを感じた。さっき感じた暗さよりも、さらに暗い。
「聞いたら、現場風景とか撮ってたっていうから」男が彼女が肩から下げていた愛用の一眼レフを指さして言った。
「あの……」宮地沙悠里は恐る恐る訊ねた。
「小田です」
「あぁ」
　宮地沙悠里はがっくりと地面に膝をつきそうになった。こちらの素敵な男性は、私の雇い主ではないか。あの白馬の。馬の方じゃなくて、それに乗っている方。私は、雇い主にあんな態度をとってしまったのか。そうと分かっていたら、あなたさまにあまってる方のお尻をご提供いたしましたのに。事と次第によっては、胸の方も。
　彼女はクビを切られることを覚悟した。言い訳の余地もなかった。
「すいませんでした！」
　しかし、そう言って頭を下げたのは、驚いたことに小田完哉の方だった。
「え、あの」予想外のことに宮地沙悠里は慌て、歯切れ悪く言った。「やめてください。私の方こそ、手を出したりして……」
「いや、宮地さんは何も悪くないです」
「え」
「言い訳にしかならないんだけど、ぼくも立場上、あの人を立てざるをえなくて」小田完哉は言いにくそうに言った。「でもホントは、あの人にはあれぐらい必要なんですよ。自分でできないのが、どうにも情けないんですけど……」

　宮地沙悠里は、弁解する小田完哉を驚いたように見ていた。殴ってもＯＫ？　あれくらい必要？　話の分かる、わりといい男じゃない。

　先ほどの一件についてお互いに再三頭を下げたあと、小田完哉と宮地沙悠里の二人は波止場のベンチに座った。
「少し落ち着きましたか？」小田完哉が伺いを立てた。
「あの、はい」宮地沙悠里はまだ恐縮していたが、気を使って言ってくれているのが分かって少し気持ちが慰められた。
　五月の空はすっきりと晴れ、海からの風が心地よかった。
「送った脚本、読んでいただけましたか？」小田完哉が切り出した。それは映画に関わる大勢の人と話をするとき、彼がまず最初に訊くことだった。
「はい、読ませていただきました」宮地沙悠里は雇い主を前にそれなりに身を引き締めて答えた。悪くないとは言ってくれても、いざ仕事となれば話は別となるかもしれない。
「どうでした？」
「メロドラマっていうんですよね、こういうの」
「えぇ、すれ違いですね」
「うまくいきそうでいかない感じが、いいですよね」
「えぇ」
「ありますよね、そういうこと」宮地沙悠里は、内容に共感した様子で言った。
「ありますね」小田完哉は思わず身を乗り出して同意した。それから少しバツが悪そうになって付け足した。
「って言っても、自分の中で都合よく美化してそんな風に記憶しているだけで、現実にあったこととは全然違うかもしれないですけど。そのとき相手がどう思っていたかは分からないっていうか」
　宮地沙悠里は、彼を捨てたという婚約者とのことでも言っているのかと思って少しおかしかった。
「私も多分、そういうところあります」彼女はそう言うに留めた。
「実際にはこんなに、何て言うか、情緒的というか、ロマンチックだったりは、なかなかしないですよね」
　小田完哉は映画と現実を比較して言った。自分の身に起きたことを必ずしも自分で笑えるわけではないから気づかないこともあるが、現実はいつももっと喜劇に近かった。
　宮地沙悠里も彼の言っていることがよく分かった。彼女は脚本を読みながら若い頃にした不倫の恋を思い出したのだった。映画の主人公たちと自分の経験とが、それほど重なるわけではなかった。しかし、それでも記憶が揺さぶられるところはあった。

「でも、そのとき感じたことは、きっとお互いに本当に感じたんだと思います」
　小田完哉はそう言った彼女の横顔を見た。過去の恋愛を思い出しているのか、先ほどの人を取って食わんばかりの形相が消えて、女性らしい柔らかい表情が浮かんでいた。頬骨もほどよい高さで、よく見れば整った顔立ちだった。
　最初は気が強いどころじゃない恐ろしい女のように思ったが、感性の豊かそうな目からはむしろ何か不器用なものを感じた。
「それで映画とかがあったりするんでしょうね」
「脚本、面白いと思いました」宮地沙悠里が改めて言った。
「そうですか。よかった」
　小田完哉はそう言うと姿勢を正し、「宮地さん」と呼びかけた。
「はい」
「さっきのことは本当に申し訳なかったんですが、パンフレットの件、引き続きお願いできますか？」
「私で、いいんでしょうか」宮地沙悠里はおずおずと訊ねた。やはり関係者を殴ったことはなかったことにはできない。
「脚本を気に入ってくれたなら、やってほしいです」
　小田完哉は映画の制作状況と、主に資金調達の面で瀬田荘介を起用せざるをえないことなどを簡単に説明して言った。
「あの爺さん、演技も大袈裟だし、わがままだし、問題も多いんだけど、多少のことは大目に見なきゃいけなくて」
「そうですか」宮地沙悠里はセクハラされた者としては最大限の理解を示した。
「それでも脚本そのものは気に入ってくれてるんですよ。そうじゃなかったら付き合えないところです」
　宮地沙悠里はなるほどと頷いた。
　どんな仕事も何の妥協もしないでできるはずなどないのだった。とすれば、人と一緒に仕事をするときに、少なくとも内容に共感しているかどうかという判断基準を持っていることは案外大事かもしれない。まして、映画制作のような共同作業となれば尚更だろう。
　宮地沙悠里は、最初この話をもらったときよりも積極的に、この仕事をやりたい気持ちになっていた。
「私でよければ、是非やらせてください」
「はい。ではよろしくお願いします」小田完哉は頭を下げた。
「よろしくお願いします」宮地沙悠里も恐縮して頭を下げた。
「予算も十分ってわけではないし、地味ではあるんですが、うまくいけばいい映画にな

ると思うんですよ」
「はい、がんばります」

　そのとき、小田完哉の携帯が鳴った。「ちょっと失礼」と言って、彼はベンチを立って電話に出た。手短に話して電話を切ったあと、申し訳なさそうに言った。
「また何かあったみたいで、戻らないと」
「あ、はい」
　宮地沙悠里も慌てて立ち上がった。
「宮地さんとも、もうちょっと細かい話しないとですね」
　パンフレットのデザインや構成については、まだ何も決まっていなかった。
「どうしましょう」
「遅くなっても大丈夫ですか？」
「はい、私は全然」
「そしたら、あとで携帯に連絡します。それまで適当に観光でもしててもらえますか」
「はい」
「といってもあまり見るものないか」小田完哉は、人差し指で額を掻きながら辺りを見回して言った。「あそこに熱海城があって、来宮の方に起雲閣ってのがあって。あとは普通に商店街とか、あとはそこの貫一お宮とか……」
　そうやって観光スポットを並べながらも、あまりお勧めするという調子にはなれなかった。「今日は花火はやらないんだよな」
「大丈夫です。適当に見てます」宮地沙悠里は笑って言った。
「すいません。もしあんまり遅くなっちゃうようだったら、夕飯でも食べましょう。その方がゆっくり話せますし」
「そうですね」
　小田完哉は段取りをつけるつもりでそう言ってから、これではまるで誘っているようだと感じ、同時に島田の思う壺になってしまっているとも感じて、なんとも決まりが悪くなった。
　宮地沙悠里も何でもないように調子を合わせたが、やはり小田完哉が感じたことと同じようなことを彼女なりに感じていた。
「あの、島田さんが言ったからってわけじゃないですけど」
　小田完哉はやや弁解がましく言った。しかし、そう言うことで、むしろ宮地沙悠里を単なる仕事相手以上のものとして意識しているところがあったことを露呈させてしまったようだった。
「かまいませんよ」

宮地沙悠里はそんなことには触れず、ただ笑って言った。
二人はふと視線を交わし、やや気まずそうに微笑み合った。
「それじゃ、あの、またのちほど」
「はい。よろしくお願いします」
宮地沙悠里はそう言って笑顔で送り出した。
小田完哉は片手を上げてそれに答え、小走りで現場に戻っていった。

＜了＞

彼の色恋沙汰、彼女の色恋沙汰（全話収録）

http://p.booklog.jp/book/109081

著者：十佐間つくお
著者プロフィール：http://p.booklog.jp/users/tsukuo78/profile

感想はこちらのコメントへ
http://p.booklog.jp/book/109081

ブクログ本棚へ入れる
http://booklog.jp/item/3/109081

電子書籍プラットフォーム：ブクログのパブー（http://p.booklog.jp/）
運営会社：株式会社ブクログ